ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

迎　春　　**平成12年元旦**

昨年、地区全体が完成したＪＲ尼崎駅北地区から大阪市を望む
（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ　　2000年1月1日

●あけましておめでとうございます …… 2
●第１回高石楽市楽座「高石で、メリークリスマス～なんでも早いのがええねん！～」が開催されました …… 5
●ＪＲ尼崎駅北地区再開発が完成 …… 8
●地域資源を活かした都心再生 ……10
●環境と福祉の優等生“クリチバ”……12
●“加里屋まちづくりセンター”が開館しました ……14
●世界は広く、深い ……15
●街並み景観を巡る合法性と慣習 ……17
●うまいもの通信 ……18
●新刊旧刊書評紹介 ……19
●まちかど ……20

NO.99

あけましておめでとうございます。

21世紀への希望

取締役会長　三輪　泰司

昨秋、龍谷大学経営学部の特別講義最終日、受講学生に質問してみました。「21世紀初頭、企業経営等の第一線に立つ諸君が、希望をもてると思う事柄は何か」と。43％と最も多いのは「環境」。人類が地球にしてきたことを反省し、特に企業が人間のために自らの存続を期して、真剣に環境問題に取り組むこと。

企業は従来の量的拡大、費用縮減に加え、第３の動機と行動規範を見出してきています。

環境会計のように、市民へ率直に事実を公表し、信用獲得に努め、技術開発から商品販売まで、新しいスタイルの追求です。

組織の維持と成長のために努めるのは、経営者の責務ですが、組織には定隷や倫理綱領でもって、行動の理念と基準を課すことが求められます。何を株式上場、取引・注文先選定の基準としているか求められます。

「日本人が日本を見直す」という意見もありました。山紫水明、花鳥風月の固有の風土を大切にする心優しい国民の国・日本が、平和を求める世界の人々から尊敬されるようになること、それこそが最も強い国だと。

人と自然に優しく、美しく、逞しい感性と心情豊かな芸術の時代、そのような21世紀を担おうとしている若者達に希望をもちました。

西安大雁塔（99.6.28）
南城壁東、和平門の南、大慈恩寺。玄奘法師がもちかえった教典と仏像をおさめるため 652年に修建。7層64m。長安城→西安は変わり塔も修復を重ねているが今もその姿を伝える。

具体の実践がコンサルタントの役割

代表取締役社長　金井　萬造

平成11年の社会経済動向を振り返ると、打てる対策はリストラクチャリングも含めて実践されてきたように思う。しかし、単なるリストラではなく、本来の意味での再構築の要素はまだ弱いようだ。経営組織の運営のあるべき姿や地域社会像などその中でのコンサルタントの役割の明確化と再認識が大切だと痛感した。新しい時代を創るための役割が非常に大きいと理解した。

「交流と連携」という地域振興のキーワードについていえば、その行為の主体者の明確化や行為の必要性の掘り下げがなければ空論となってしまう。地域づくりの目標でも、前提条件でもある地域の魅力化、多方向から吸引力の強化ができる状況をシステム的に構築していく。周りから集まってくる過程で、交流と連携の企画もスタートしていく。魅力的状況とは自然、産業、生活、人々が元気な将来像とライフスタイルが明らかになっている状況である。人の元気が付加価値をつくっていくシステムの解明とコンサルタントとしての役割が特別に大切になってきている。

コンサルタントとして調整力、オーソライズ力、事業化が重要なキーワードになりつつある。努力したものが新しい芽をつけ一歩でも前進できるなら本当に幸せである。

京都ふるさと塾展：新田の棚田

今年もよろしくお願い致します。

チャレンジの世紀への助走の時

京都事務所長　山口　繁雄

20世紀は、科学技術が発達し、工業を中心とする経済社会が発展しました。

しかし、地球環境問題が顕著になるにしたがって、「持続可能」とか「共生」という言葉がキーワードとなり、私達人間も含めた生態系の保全が重要な関心事となっています。

考えてみますと、私達は、心身共に豊かな生活を求めて、産業経済を盛んにしてきた筈ですが、その結果が自らの生命をも心配しなければならないというのでは、何をやっているのか分かりません。

まちづくり、地域づくりの中でも、今一度どうすれば皆が幸福になれるのか、を考え直していかなければと考えています。

しかし、この「皆が幸福」を実現するのは大変な困難を伴います。それでも、21世紀は、その困難に立ち向かわなければならない世紀ではないかと思います。そうしたチャレンジが、新しい産業を生み出し、私達の生活を豊かにし、文化を育んでくれるような気もしています。今年こそチャレンジの世紀への助走の時、と肝に銘じて、気分を新たに新しい年のスタートを切りたいと考えています。

本年もどうかよろしくお願い致します。

智恵と情熱と社会的使命感

大阪事務所長　杉原　五郎

晩秋の11月、第17回関西まちづくりフォーラムを開催しました。講師の中村順子さん（ＣＳ神戸理事長）には、震災復興と市民事業についてお話していただきました。あんしんし隊、ふれあいサロン、アタフタクッキング、車ネット小旅などといったユニークな市民事業の起業を支援したり、自ら受託事業や研修事業などに取り組んだり、中村さんの話は実に具体的で迫力のあるものでした。

ＣＳ神戸の経験は、これからの日本の社会や地域のあり方を考える上で示唆に富んだものだと思います。「地域に根ざしている」「社会的使命感を共有している」「社会的なニーズを的確につかんでいる」「市民事業として成り立たせている」などの点が注目されます。福祉やまちづくり分野のＮＰＯとしてだけでなく、ＮＰＯを支援する中間組織としても今後の活動が期待されます。

21世紀を目前に控えて、地域にはいろいろな変化が生まれています。地域の変化を注意深く見守りながら、自らの社会的役割を明確にしていくことが求められています。智恵と情熱と使命感を持って新しい歴史の扉（とびら）を開いていきたいと思います。

長浜のまちづくり役場とプラチナプラザ

あけましておめでとうございます。

温故知新で新しい時代のモデル創出を

名古屋事務所長　尾関　利勝

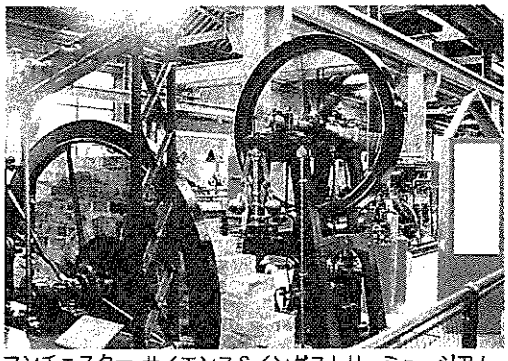
いよいよ21世紀へあと365日のカウントダウン。心が引き締まる年の始まりです。

世相は落ち着きを見せつつも、相変わらず厳しい状態ですが、志を捨てず、夢を切り開くべく奮闘しています。

今は何が正しく、間違いなのかを検証し、何よりも適切な変革の手を速やかに打つべき時です。反面、追い込まれた弱さは冷静さを失ってあらぬ方へ滅亡の道をたどりかねない危険性を持っています。だからこそ冷静に社会の長期トレンドを見据えようと歴史を振り返りつつかつグローカルに考えて来ました。

福祉、環境、歴史、文化、情報化、先端技術、片や行革と分権、高負担とＰＦＩ、公民連携とＮＰＯ、コミュニティ、全て地域社会と人間の生き方を共通項として、それぞれの意味が問われています。言い換えれば、社会のあらゆる面で哲学が現実的な意味を持つ貴重な社会状況でもあると思えるのです。

21世紀への幕開けは『江戸の想像力』（田中優子著／ちくま学芸文庫）に見るような様々な志を共有するネットワークが日本中に渦巻いて、脱工業化と都市型社会の新しい生き方が具体的に示されるような幾つかのモデルが各地で展開し始めることを予想しています。



マンチェスター サイエンス＆インダストリーミュージアム
英国近代工業化の足跡を動態で見せる

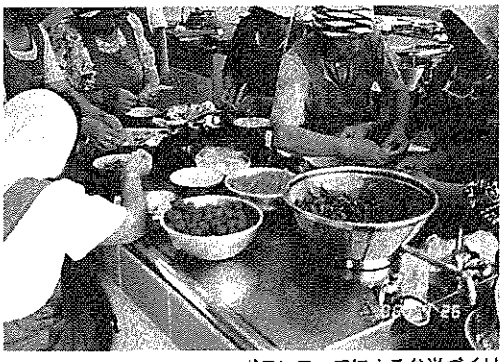
福祉の原点が計画の原点に

東京事務所長　小林　佑造

都心部では、景気の低迷と空き敷地の合築利用による組合せによって新しい動きと相乗効果がでてきています。その一例ですが庭なし一戸建てが30歳代の独身たちに売れていますし、学校跡地に建てられた中学校と特養との合築施設は高齢者と接することで、子どもたちは落ちつきを取り戻すなどの効果が生まれてきているということです。

今年から介護保険制度が始まりますが、福祉は“近隣の人たちに対して、自分に何ができるかを自らに問いかけることから始まる”のが原点とされていますが、このことが見かけだけでなく当たり前のこととして一般的に普及してくるならば、福祉の原点がものづくりの基本となっていけば、これからのものづくりが大きく変わっていくものと感じています。

また、老齢人口は2025年27.4％、2050年32.3％と予測されており、生産人口の層がまだ厚い2010年頃までがものづくりを充実する時期で、2050年頃からは統廃合現象や施設の転用が始まってくると考えられることから、計画づくりやものづくりについては、組み替えができ用途変革に耐えうるものとしての提案が求められてくるだろうと予想しています。



ボランティアによる弁当づくり

今年もよろしくお願い致します。

2000年を迎えて ～最近気になっていること～

九州事務所・㈱九州地域計画研究所
代表取締役社長　山田　龍雄

2000年といって改めて考えることはありませんが、ひとつの区切りとして最近気になっていることを述べたいと思います。

携帯電話のパーソナル化について

ここ数年で我々の日常の暮らしで何が最も変わったかといえば、携帯電話による「ひとり言」が街中あちこちから聞こえてくるようになったことと、インターネットやE－メールをするのが当たり前の時代になってきたことのように思う。特に、最近の若い人は平気で電車やバスの中で携帯電話をし、“集”の中で個の空間に浸っていることが気になる。個に埋没しているため廻りが見えない、廻りとうまくコンタクトができない人が増えてくるのかも知れない。

働きたいが、働く場所がない高齢者

あるベッドタウンの町のまちづくりの計画をしている中で、福祉課の方に聞いた話である。この町では、会社勤めの高齢者の退職者が増えはじめ、新たな仕事先としてシルバー人材センターに登録する人も増えていると聞くが、なかなか仕事がなく、センターに営業専門の人を配置したとのこと。筑豊地域の医療機関が充実している町では、高齢者の病院通いが多く、県下でも一人当たり医療費が高い町となっている。これから年金受給の年齢も引き上げられることを考えると、会社勤務の退職者を活かし、引き続き働ける場をつくっていくことまた、できるだけ元気な高齢者は働いてもらい、仕事で病院通いがあまりできないようにするなどの取り組みが必要であるように感じた。

第１回高石楽市楽座「高石で、メリークリスマス ～なんでも早いのがええねん！～」が開催されました

中塚　一

前回のニュースレターでお知らせしていました「第１回高石楽市楽座」が昨年12月５日に高石商工会議所商店街連絡会主催で開催されました。当日は、早朝から小雨が降っていましたが、各コーナーや催しの準備が進むにつれ、参加者の熱気で10時のオープニングまでには雨もあがりました。

３サンタによる開会宣言

オープニングは、市長、商工会議所会頭、商店街連絡会会長の３サンタクロースによる開会宣言と市民音楽団によるファンファーレにより始まりました。開会とともに、地元子ども会によるもちつき大会、高石駅西地区まちづくり協議会協賛によるつみれ汁のふるまい、漁業協同組合によるとれとれ魚市、市内のお店によるわくわくバザール、とっておきフリーマーケットなどと、来られた方々が目移りする程の催しやイベントが目白押し。

ラッキーチケットによるエコと販売促進

主催の商店街連絡会は、全国的に有名になった早稲田のゲームつき回収機のラッキーチケット（詳しくは、No.98で紹介した「スーパ

だれが仕掛けた３サンタ

目移りするイベントが目白押し

サンタと一緒にハイ・ポーズ

ーおやじの痛快まちづくり」をご参考に）を高石風にアレンジして、空き缶を持ってきてくれた方に、商店街の各店の割引券や友好都市の和歌山県清水町の温泉入浴半額券、協賛企業のガスファンヒーターなどのチケットの抽選と、さらに臨海工業地帯の企業で作られている製品（ペン立てやゴミ箱、サランラップなど）をつけるという豪華イベントも企画されました。当日は小雨も降り、飲み物の売れゆきが良くないため、急きょ周辺の商店街や駅から空き缶を集めてきて、サンタクロースが会場の子ども達に空き缶をクリスマスプレゼントするというイベントも企てられました。これも手作りイベントならではの身の早さで、合計約600枚のラッキーチケットを持って帰ってもらえました。なお、場内では空き缶のポイ捨てどころか、空き缶はほぼ全て空き缶圧縮機の中に分別収集されたことは言うまでもありません。ラッキーチケットは、有効期限が６月末の清水町の温泉入浴半額券（ゴールデンウィークでの利用を考え）を除き12月末としていますので、はたして何枚利用されるのか、打ち上げ及び反省会の酒の肴として今から楽しみです。

クリスマスツリーにも商売人の知恵が

今回のテーマ「高石で、メリークリスマス」を最も会場でアピールしてくれたのは、なんといっても市内７ヶ所の市立幼稚園の園児による“かわいい、楽しいクリスマスツリー”でした。当初の企画では、廃材や段ボール等でツリーを作る予定でしたが、企画会議で「作るのなら、本物のモミの木で子ども達に飾ってもらいたい」という一言（？）で、７本の葉振りの良いモミの木を清水町にお願いして山の頂上付近から切り取っていただきました。さすがに本物は違い（運搬を担当された方は、さすが本物は重い？との弁）、会場では両親や祖父母が幼児をクリスマスツリーの前に立たせて記念撮影、昼から人が幾分少なくなった時には、急きょ「サンタ（中は市の職員）と一緒にポラロイドカメラで記念撮影をしよう」というイベントに使われました（実は、事務局では「子どもがくれば、両親、おばあちゃん、おじいちゃんもついてきて一石二鳥の客寄せイベントやで」という大阪の商売人らしい意見がありました）。

大漁旗も商店街にお目見え

高石らしさでは、やはり大漁旗とともに現れた“高石とれとれ魚市”。毎週第１日曜日に高石漁港で開かれている魚市をバージョンアップして、近海でとれたとれとれの鯛やアンコウ、アジ等の鮮魚の販売とともに、揚げたての天ぷらの販売と飲食コーナーがお目見えしました。揚げたてのあつあつ天ぷらとビールやジュース、さらに高石駅西地区まちづくり協議会の協賛によるいわしのつみれ汁のふるまいサービスと泉州ならではの催しでした。

サンタによるもちつき大会

「商店街活性化は、地域の方々と共に」をテーマに企画された“地元子ども会によるもちつき大会”では、サンタもつき役に参加して約5時間の長時間におよび、地元のお父さん方が代わる代わるもちを突き、おかあさんや子ども達がそれを丸め、会場に来られている方々にふるまわれました。

キャップもみんなでかぶれば怖くない

市内のお店が参加した“わくわくバザール”や市民による“とっておきフリーマーケット”では、各お店でクリスマス関連の商品も置いていただき、またクリスマスの雰囲気を盛り上げるため全員にキャップをかぶっていただきワイワイと盛り上がっていました。

ささやかながらまちづくりも紹介

“高石まちづくりコーナー”では、会場が位置する高石駅周辺で進められている市街地再開発事業や土地区画整理事業、密集市街地整備促進事業などがパネルや模型、パンフレットで紹介されました。

フィナーレはクリスマスソングメドレー

さて、夕方4時からのフィナーレは、“市民音楽団によるクリスマスソングメドレー”。夕暮れが近づく中で、心地よい疲労感とともに、北風ではなく心温まるクリスマスソングが体の中を流れました。

体験した後で理論を勉強

今回のイベントでは、ショッピングセンターで用いられている様々な一般的な手法を活用しています。例えば、ポスターや広報、協賛企業のチラシの裏の広告等を活用したＰＲ、各種イベントによる集客力のアップ、ツリーや帽子・バッジ・サンタの衣装・のぼり・クリスマスソングのＢＧＭ等によるイメージの統一された環境・空間づくり、生鮮品と買い回り品とイベント空間等のゾーニング、チケットによる継続性のある販売促進、場内放送による各店舗の情報発信、閉会前の生鮮大安売りの呼び込み等々。どれが効果がありまたなかったのかを商店街の方々に見ていただき、少しでも実際の商いの場に活かしていただければと考えております。

心温まるクリスマスメドレー

人と人の輪の広がり

今回のイベントは、当初の数名の言い出しっぺが集まることから関わりをもち、井戸端会議から地域に小さな輪が広がり、それぞれの様々な人のネットワークが絡み合って、短期間の間に人と人の輪が見る見るうちに広がっていくことをダイナミックに体験させていただきました。また、最近、よく頭をよぎる「何をするかではなく、誰がするのかが大切である」を今回、最も考えさせていただきました。

報告書づくりから脱却してまちに出よう

最近、「中心市街地活性化基本計画は作ってみたものの実際にはなにも変わらない。」という声をよく聞きます。今回イベントを通じて人と人との輪が広がり、実際に地域や現場で動く者同士が顔を付き合わせて、まずは話し合う場ができてきたように、中心市街地活性化基本計画は報告書を作るのではなく、計画づくりのプロセスにおいて地域における新しい人と人との関係を作っていくことが最も大切だと考えています。

（大阪事務所　なかつか　はじめ）

ＪＲ尼崎駅北地区再開発が完成
－再開発事業での合意形成の一試み－

馬場　正哲

１地区20年の感慨

一昨年の平成10年10月に20年を費やして山科駅前再開発事業が完成、そして昨年の平成11年11月にはＪＲ尼崎駅北地区の約９haの再開発事業が完成しました。この事業も、昭和55年の調査着手から20年を費やしたことになります。再開発事業の遠大さとともに、振り返ると私自身の技術者としての経歴の大半を費やしてきたことに驚愕しています。

両市街地再開発事業が長期の時間を要したのは、建物や権利関係が複雑に密集する中心市街地で、地区住民が事業に参画することを前提としながら、事業の初期段階にはまちづくりが行政主導の時代にあって合意形成のノウハウが未成熟であったことが考えられます。

昔のことになりますが、再開発の合意づくりの経緯を振り返ってみました。

尼崎の新しい拠点形成へ

この地区は「潮江」と呼ばれ、古代は東大寺領猪名庄の集落が形成されていました。明治に東海道本線が開通し神崎停車場（尼崎駅）が置かれ、大阪と舞鶴とを結ぶ阪鶴線（福知山線）や尼崎線の結節する位置で、旧小田村の中心でしたが、工業の立地などで市街地の発達はあまり伸展しませんでした。

再開発前の地区は、駅前にキリンビール工場が立地し、その北に東西の商店街と戦前からの道路の狭い木造密集住宅地が広がり、建物の老朽化とともに人口の減少と高齢化が進んでいました。脆弱な基盤と権利の錯綜が、地区更新の大きな阻害要因となり、商業の活性化や防災整備が課題となっていました。

また、地区の南部地域は、環境問題や産業構造の変化から、工場や人口の転出がつづき、地域活性化が長年の課題でした。このため地区更新の起爆事業として、東西線の開通後、県北部と阪神地域及び大阪との重要な結節点として、また市の東の玄関口として、本再開発が期待されてきました。

再開発反対の中、住民の推挙で関わる

昭和59年、人口減少下でリスクの伴う商業計画や一方的な市の事業推進に不安を覚えた住民が、当時住民側から各地の再開発事業に取り組んでおられた立命館大学の遠藤晃教授に相談し、先生の推挙で私どもが本事業の商業計画に関わることとなりました。

反対住民からの推挙で関わったことは、多くの誤解とともに、新たな理解を得たような気もします。「私どもは、誰彼のために仕事をすることはいたしません。専門家として、地域と地域の生活者のために再開発の是か非、そしてどうあるべきかを一緒に考えたい」が地元での第一声でした。しかし、専門家という言葉にはいささか唇寒い思いが過ぎったようにも覚えています。行政・施行者・住民・権利者・反対者の狭間で、強烈な行政主導の現場で、専門家とは如何にあるべきか。

市が計画見直しを決断

市は当初住民主体による組合施行の再開発を呼びかけました。しかし熟さず、市主導で地元「潮江地区まちづくり協議会」を発足、計画に着手し、出屋敷地区を市施行で事業中でもあり、住宅・都市整備公団（現在：都市基盤整備公団）に施行を要請、昭和58年４月に「地区整備基本協定」を締結していました。

その後、昭和60年２月権利変換モデルが発

表され、経済負担が大きいなどの理由で反対が運動化する兆しとなりました。市は、協議会役員を含む主要な動きに対して交渉を持ち、善処の方法を協議した結果、遠藤先生の仲介により「まちづくりを進めて行くためには、計画案を自分達がつくりあげたものにすることが大切である」との考えから、住民参加によって、全体計画を根本的に見直すことを決断しました。

計画づくりに住民参加を制度化

住民参加による計画の見直しは、以下の新組織を設置して行うこととなりました。

①「まちづくり協議会」の下に「まちづくり計画研究会（以下研究会）」を新たに置く。

②「研究会」は、協議会を中心に各立場を代表し、かつ積極的に参加できる委員を置く。

・助言者（遠藤晃先生）を置く。

・行政および事業推進者として尼崎市、公団が計画づくりに参画する。

・専門的な検討業務と調整を、市が委託契約するコンサルタント（当社）が行う。

③「研究会」の下に「運営委員会」を設け、研究会運営と見直しの具体的検討にあたる。

④「研究会」は、計画見直しについての経過と基本計画案を協議会に報告提案する。

計画の見直しは、運営委員会を中心に、相互の検討、協議を踏まえて進められました。また、地元への報告、まちづくりに関する学習、見学などを通じ地域の低迷する現状と課題を把握する中で、地域の活性化意欲の形成、地域の自主努力の重要性などを認識していく過程として取り組まれました。

計画の段階的対応と残された課題の明記

まちの問題発見から始め、課題を整理、その対応の方法検討、地区の将来像の議論を重ね、昭和61年７月「潮江地区再開発マスタープラン」を合意策定。続けて、都市計画決定など、各事業段階で計画の明確化と次のステップでの対応策を明記しながら、住民との話し合いの中で権利割合、融資の制度など事業の方法や支援策等を手順を追って合意し決定していくことが出来ました。

「やる気のある人で希望する人がすべて残れる諸条件の確保」が不文律となり、「残された課題対応」を話し合うという、計画策定のルールが確立していくこととなりました。

地域の主体性の真価が問われる

当時30代の私は、技術者として油の乗りかけた時期でしたが、特に技術を駆使してやった印象はなく、誠実にぶつかるしかなく、実に沢山の人と話し、人のことを考えたということが思い出されます。

当時の再開発は、「する側」と「される側」との関係、即ち行政対住民の関係が全てでした。この関係に「参加」の「発想」と「システム」を導入し、その実現に努力してきたのが「潮江方式」であったと考えます。

まちづくりが物的に完成してみて、すごいことをしてきたなというのが実感です。このエネルギーに感動し、尼崎市と公団の再開発に対する真摯な態度と努力に感服する思いで一杯です。

一方で、目指してきたものは何であったかも考えさせられます。生きた街として、当時言葉すらなかった「協働」のまちづくりによる地域の主体性（スピリット）がこれからも問われていくように思います。

（大阪事務所　ばば　まさあき）

地域資源を活かした都心再生
英国バーミンガムの例

尾関　利勝

プロローグ

1999年10月２～３日(土・日)、時雨模様に秋の気配が漂う岐阜県郡上八幡町と大和町で『1999まちづくり交流フォーラムin岐阜』の幕開けが開催された。文字通り日本を代表する山紫水明の美しい町である。

八幡町は長良川の上流、吉田川に沿う古くからの集散地・城下町で、整然と維持された町並みに歴史と水を軸とした暮らし向きを如実に感じさせてくれる静寂な町である。

この町も毎年盆には町民が、帰郷者が、そして躍り好きの観光客が連日一晩中踊り明かす「郡上躍り」で一躍華やかな町に変貌する。

町内のそこかしこに流れる清澄な用水は今も昔と変わらず町民の暮らしを支えるインフラとして生き続け、そして町並みとしての文化に昇華して、訪れる観光客の目をいやす、安らぎの町でもある。

大和町は中世の領主「東」氏の居城跡を持ち、発掘された中世の庭園跡の整備をきっかけに、東氏にまつわる古今伝授をテーマとする歴史と文学と地域の自然環境を融合化したフィールドミュージアム『古今伝授の郷』を創った。

山間の谷間に開けた棚田の土地と竹藪を活かし、まず緑の環境を京の庭師の手で整え、次いで伝統・借景の手法を用い、谷間の風景に建物をとけ込ませるべく、手練れの建築家によりしつらえられた瀟洒なミュージアムが見るものの心を和ませ、再びこの地を訪れたくなる名残を強く抱かせる。

両地区でのまちづくり交流フォーラム99の幕あけは、英国からお招きした政府の環境管理官デレク・ゴーリング氏との水の町八幡の散策と大和町での記念講演からだった。

運河と都心再生の町・バーミンガム

1999年10月下旬、秋にしてはまだ暖かく好天の続く英国中西部の工業都市バーミンガム市を中経連・中部産業活性化センターによる空港都市機能調査団の一員として訪れた。

ここではコンパクトに機能がまとめられ、整備拡充が進むバーミンガム空港とこれに隣接するナショナル・エキジビジョンセンター、都心部ではアストン大学に隣接し、大学と密接な関係を持って産業振興とベンチャー育成に貢献しているアストン・サイエンスパークの訪問視察、及び現地駐在日本企業社員から名古屋都市圏と地域性が似た工業地域の経済事情を聴く事が主眼であった。視察の主題では無かったが、英国、とりわけ地方都市での

郡上八幡“やなか水のこみち”
出典：パンフレット

バーミンガム　運河再生と倉庫の再開発

多様なＰＦＩの現場を垣間見ることができた。

視察後の夕方を待って、再生された運河と商業再開発された倉庫群を見るためにカメラとビデオを首から下げて、例の如く業界人顔(私の海外視察の基本ファッション)をして町に飛び出した。ホテルが再開発エリアにあった事が幸いして、運河沿いにほぼ再開発エリアを歩くことができた。

小さな船だまりと有料係船場、ほのかに灯りの漏れる小さなバー、遊覧船やレストラン船を眺め、ゆっくり散歩する家族連れや老人、ジョガーやサイクリストとすれ違いながら、橋をくぐると鉄とガラスのモダーンなシンフォニーホールとコンベンションセンターが現れる。その対岸にブリッジで結ばれた倉庫を再生した飲食・ショッピングゾーンがある。

赤レンガ建物のガラス越しに伺える華やいだ店内の模様が楽しげだ。ちょっと立ち寄ってビールでも飲みたいところだが、はやる心で先を急ぐと新設された子供向け水の科学館、クリントン大統領も立ち寄った赤レンガパブ、

バーミンガム　キャナルサイド・ウォーク表示

バーミンガム　運河沿いのシンフォニーホール
コンベンションセンターと一体

新しく建てられたインドア・アリーナ、再開発された住宅街が運河沿いに続く。ウォーターウェイと呼ばれる運河と沿岸の散策路は、網の目のように市内を何処までも拡がっていく。

都心再開発エリアでは、この他に赤レンガのオフィス街を始め、まだまだ再開発が続いているようだった。

エピローグ

この情報を得たのは、プロローグに書いた郡上でのデレク・ゴーリング氏のお話だった。

『英国では鉄道に先立って運河が民間資本により英国全土に開発され、運輸の手段として産業革命に大きく貢献する。その後鉄道の普及とともに衰退し、運河は一時無用のものとなるが、現在は再び民営化されている鉄道と一緒に運河も国有化された。

時代が変わって運河は生活環境要素として市民から見直され、ＮＰＯの活動だけでなく政府も積極的に政策として取り上げ、市民生活のための余暇や観光振興、都心再生の場としても活用され始めた。賑わいの場として再生された典型例はバーミンガムだ』と言うお話をゴーリングさんからお聞きした時から、是非バーミンガムの運河再生と都心再開発例を見てみたいと思っていた。岐阜の山間地で英国と結ばれた「水」の縁だ。

運河の町と言えばベネツィア、再生した運河と観光商業の町と言えばアメリカ・テキサス州のサンアントニオが浮かぶ。かつてこれらの町を視察で訪れた事があるが、それぞれに個性的な魅力を持った国際的な都市であるが、バーミンガムはそれらに引けを取らない都心再開発と一体の運河再生都市の代表例に挙げられるだろう。バーミンガムの人々がベネツィアに負けない運河の町としての自負心を持っていることを充分に頷けた。

（名古屋事務所　おぜき　としかつ）

環境と福祉の優等生“クリチバ”

堀口　浩司

昨年８月に、環境都市として有名なクリチバ市を訪問しました。以下はその紹介です。

日本では中南米の計画的な都市としてはブラジリアが有名ですが、アメリカではクリチバが計画的な都市づくりの先進地として紹介されているようです。これまで日本では主として欧州型の都市計画をキャッチアップすることが多かったため、今回ブラジルを訪問して、その新世界的な都市計画の発想がとても新鮮でした。

クリチバ市は、サンパウロ州の南、パラナ州（日本の４分の３の広さ）の州都、面積は420km²、人口146万人(36万世帯)の大都市です。近代都市計画に基づいて建設された環境都市として有名で、市内には一方通行の道路が何kmにもわたって整備され、チューブ状のバス停とともに、３両連結のバスを中心としたバス網の充実もクリチバの特徴です。

パラナ州には約15万人の日系人の方がおられ、その内約３万人がクリチバ市、残りの約12万人が北パラナにおられます。今日パラナ州は、ブラジルを代表する農業州になっています。パラナ州と兵庫県は姉妹関係にあり、更に兵庫県の姫路市とクリチバ市、西宮市とロンドリーナ市、加古川市とマリンガ市とが各々姉妹都市関係を結んで活発な交流が行われています（外務省のＨＰより）。

クリチバ市の名前の由来はインディオの言葉で「たくさんの実」を意味する“core etuba”、あるいは「Let's go」の意味の“curitim”などの説があるそうです。17世紀前半にはインディオだけが住む地域であったのが、その後黄金を目当てにポルトガル人が入り、さらにイギリス、ドイツ、ポーランド、イタリア、そして日本などから入植が始まりました。戦後は、1970年代の初めに自ら都市計画家でもあるジャーミ・レナー氏(現在パラナ州知事)が市長になり、12年間の任期の間、次々と斬新な都市政策を実践し、クリチバ市はブラジルだけでなく、世界でも最も都市計画が成功した都市の一つとして知られています。

1965年　Serete Plan(デベロップメント・マスター・プラン)策定

1965年　IPPUC(Institute of Research and Urban Planning都市計画研究所)設立

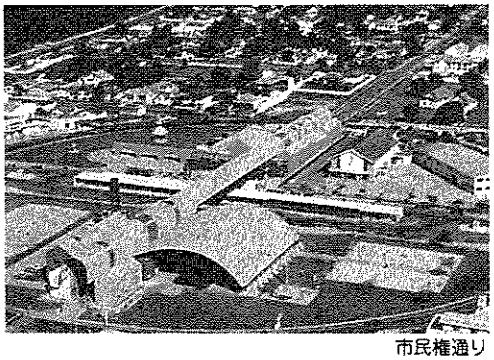
1972年　バリグイ公園整備(140haの大規模公園)、11月15日通りの歩行者専用道化

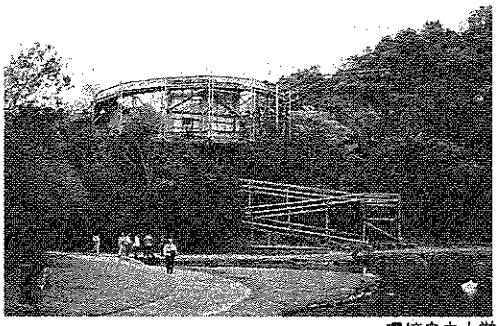
1973年　歴史的街区の修復着手

1974年　Express bus(バス専用レーンなどを用いた公共交通システム)導入

最近では、福祉や環境教育など社会的なプログラムにも重点が置かれ、子供や貧困層がリサイクル可能な資源を集めてノートや食料と交換する「Green Exchange Program(1989)」などが有名です。都市政策の中で環境問題を重視しており、福祉、教育、環境教育、産業政策などの社会的なプログラムと交通計画、土地利用、廃棄物処理、公園・緑化などを総合化した政策を打ち出しています。

クリチバ市の都市計画を考えると、1950年代から人口増加が始まっていますが、1960年代後半から近代化・工業化とともに人口が増加し、本格的な都市化プロセスに入ります。第３世界においては工業化なき都市化が比較的多いのですが、ここは高原で冷涼な乾燥地帯なため、比較的すごしやすい地域とあって、1973年には工場団地を開発し企業誘致を始めています。


市民権通り


環境自由大学

パラナ州にはアウディ、フォルクスワーゲン、ルノー、クライスラー、ＢＭＷなどの自動車産業が立地しており、クリチバにもフルカワやデンソーなどが立地しています。クリチバ市では教育や安全性、快適性が企業活動にとっても重要なインフラであると強調しています。

このように都市計画の優等生のような町ですが、その背景にはいくつか特異点があるように思います。

①在来市街地のしがらみが薄い

旧市街の放射状の街区構成を中心に、1965年のマスタープランから再生都市づくりを始めています。旧市街地も300年程度の歴史があり、植民地時代の街区形成ですから、これを変えるのは難しいのですが、大部分は戦後の都市拡張に対応したものです。

②第２次世界大戦後の都市計画

ブラジリアは政治の中心として、大規模な都市開発が進められていますが、先輩として、あるいは反面教師として、その反省とともに計画されています。ご存じのようにブラジリアはル・コルビュジェの弟子であるルシオ・コスタがマスタープランを作成しました。チャンディガールと共にコルビュジェの思想を忠実に空間化しようとした壮大な実験です。その一方、クリチバはもう少し後の時代になって、Ｊ．ジェイコブズなどの思想を反映し、モータリゼーションや公害問題の反省など今日的な問題を解決すべき都市計画を先取りしています。

③合意形成は苦手である

市民参加や合意形成といった言葉には関心が薄いようです。地縁・血縁のしがらみは薄いし、都市政策を強引に実施しないと、目覚ましい効果は期待しにくいのでしょうか。どちらかといえば「結果オーライ」の発想です。拘るべき風習や社会的コモンセンスが乏しく、嫌なら転地すればよい、まさに新世界的といったところです。

④政治的な継続性

都市計画家が市長になり、さらにその後、敵対する政党が政権を握っても、都市計画研究所(IPPUC)が残ったことで、都市政策が継承されたことは大きな意味を持っています。都市計画には政治的な側面が強く反映されるため、政治環境の変化に追随できたことが一環した都市計画を実現しうる大きな要因だと思います。

RUA DA CIDADANIA（市民権通り）

通り(Rua)ではなく、市役所の派出所・コミュニティセンターです。公共サービスだけではなく、店舗、銀行、郵便局、図書館、福祉事務所、劇場、体育館・バスケットボールコートなど、コミュニティの核となる機能を集めた施設です。この施設は、公共交通機関(バス)のターミナルに隣接してつくられ、人々が活用しやすいように配慮がなされています。

外周部の８つの核（地域生活核）にそれぞ

れこの「通り」がつくられ、これにより中心市街地への不必要な移動をしなくてもよくなるとしています。一施設当たりの利用者はおよそ20万人を想定しています。この中には、"Armazon da familia"という低所得者向けマーケットも付属しています。所得が一定額に満たない人を対象に、月３回を上限に、格安で購入できる食料品マーケットです（市場価格の約30％引きだそうです）。

環境自由大学

大学(univercite)と名付けていますが、市民と専門家向けの環境教育講座というところでしょうか。講座は１日から最長でも５日で、市民向けや専門家養成などさまざまなカリキュラムで環境教育を行っています。ちなみに講座は最大20人程度だそうです（続く）。

（大阪事務所　ほりぐち　こうじ）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

"加里屋 まちづくりセンター"が開館しました

高野　隆嗣

弊社ニュースレター96号、97号でご紹介した赤穂市加里屋地区の近況です。

まちセンのオープニング・セレモニー開催

ＮＨＫの大河ドラマ「元禄繚乱」も先月で終了しましたが、劇中最大の見せ場であった「吉良邸討ち入り」が行われたのは元禄15年12月14日。この歴史的(?)な出来事を記念し、東京や京都など全国各地でイベントが催されましたが、赤穂義士のお膝元である赤穂市でも、今年も盛大に「赤穂義士祭」が開催されました。赤穂義士祭は今回（平成11年12月14日）で96回目の開催になりますが、その前日に加里屋のまちづくりにおける記念すべき出来事がありました。

赤穂でも伝統ある商店街のひとつ、花岳寺通り商店街において、加里屋地区の住民まちづくり組織である「忠臣蔵のふるさとまちづくり協議会」の「加里屋まちづくりセンター」がオープンしたのです。

自律的な協議会への第一歩

当日は協議会主催のオープニング・セレモニーも開催されました。協議会の蔦野会長や北爪赤穂市長ら来賓による挨拶をはじめ、赤穂小学校の子どもたちによるコーラス、竹北・竹南子供会による子ども神輿や義士音頭など多彩な催しが行われました。婦人会の坂野さんらの味付け指導で、関西福祉大学の学生ボランティアのみなさんがつくった熱々のおでんや粕汁も振る舞われ、たくさんの市民のみなさんがまちづくりセンターの開設をお祝いしました。協議会の高尾さんは「このイベントを毎年充実させ、義士祭の前夜祭として発展させたい」と夢を膨らませます。

少しずつですが加里屋の協議会は、「役所のお抱え組織」から「地域住民による自律的な組織」へと変貌を遂げつつあります。会費や自前の事務局体制も整え、「行政に頼りきるのではなく、自分たちの力でまちづくりを進めよう」との意気込みが、この日の成功に結びついたといえます。

また、まちづくりの近況を記したかわら板「夢全開　加里屋充実物語」や、商店街のお店をひとつずつ紹介した「かりやぶらぶらｍａｐ」など地域の情報発信ツールも、協議会や商店街のみなさんの手づくりで配布されました。

空き店舗活用事業を活用しにぎわいづくり

加里屋まちづくりセンターは、赤穂市「空き店舗活用事業」の適用第１号です。およそ８坪ほどの木造２階建ての空き店舗を改装し、協議会活動と情報発信の拠点として活用するほか、「地域のみんなが気軽に語り合える場所にしたい」と協議会の千羽さんはいいます。

まちづくりセンターの２軒お隣には、空き店舗活用事業適用の第２号「忠臣蔵サミット

加里屋まちづくりセンター前の空き地広場でのイベント

「忠臣蔵サミット館　長矩」の店内

館　長矩」もオープンしました。この忠臣蔵サミット館では、赤穂義士ゆかりの全国各地の物産品が展示・販売されています。今後も２階は高齢者福祉に関する情報発信拠点、３階は市民の集うサロンとして順次開設する予定とか。また、同店の手作りソフトクリーム（350円）は、地元のフランス料理店サンタムールのシェフによるこだわりの逸品です。

20世紀最後の年となる今年は、これまで準備が進められてきた街路事業もいよいよ一部着工します。また、観光の拠点施設も整備が検討されています。にぎわいの再生に向け、一歩一歩前進を続ける加里屋地区に、今年も目が離せません。

（京都事務所　こうの　りゅうじ）

近況　世界は広く、深い

三輪　泰司

昨秋11月、環境保全とエネルギーの勉強に中国・雲南省を訪問しました。昆明の西南、そそり立つ名勝「龍門」から眺める昆明湖は、工業廃水で汚染が進んでいましたが、終始ご案内頂いた昆明大学の孫教授は、大阪ガス㈱の技術を導入して昆明ガスの工場廃液処理に顕著な効果を上げておられました。

観光・流通・物価

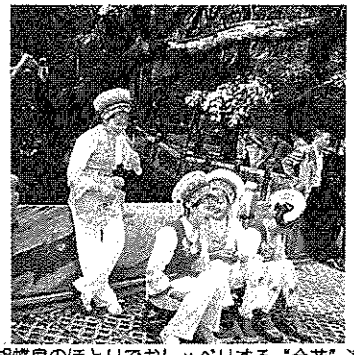
常春の雲南は、花と蝶々で知られています。10月末まで昆明で、世界園芸博覧会が開かれ、空港のターミナルビルもピカピカ。雲南には中国55の少数民族の半ばが住み、エキゾチックなところでもあります。

雲南航空で大理まで足をのばしました。バイ族の土地です。民族衣裳がとても美しく、可愛い娘さんの案内で、三塔寺を見たり、伝統的な藍染の工房を訪ねたりしました。

ここでも新しい市街を建設していましたが、耳の形をした美しい湖を汚さないようにしてほしいものです。

中国は広大ですから、物を運ぶコストがかさみます。日本では津々浦々にまで、同じ商品が、同じ値段で売られていて、それを便利と思うか、少数民族の手工芸品は雲南へ行かねば手に入らないのがよいと思うか、流通とサービスのあり方を考えさせられました。

昆明の奇勝・石林は中国人観光客であふれていました。これからは、日本人観光客から外貨を獲得するだけでなく、先進地・上海あたりからの中国人自身の観光行動が巨大市場になることは確かでしょう。


胡蝶泉のほとりでおしゃべりする“金花”達。
バイ族の未婚の少女を金花というそうです。

中国・日本・アメリカ

11月10～13日、日本建築家協会(ＪＩＡ)鎌倉大会。建築家資格の自主認定制度を始めた近畿支部の報告が注目されました。台湾地震についての議論と、トルコ地震に神戸の会員を中心に活動したＪＩＡ支援チームの報告。６月のＵＩＡ北京大会で、2005年大会誘致でイスタンブールに破れた日本が、いちはやく駆けつけ、トルコの建築家協会はじめ政府もたいそう感激し、感謝されたそうです。

アメリカ建築家協会(ＡＩＡ)マイケル・スタントン会長夫妻と再会。北京大会で採択されたUIA-Acordをまとめた職能委員会ＰＰＣのジャン・キナン元議長のお話も聞きました。アメリカと中国が共同議長を勤めているのです。雲南・大理の三塔寺に、台湾からの寄進でできたという新しいお堂がありました。台湾と日本の人的関係があることは結構なことですが、台湾と中国本土とはもっと濃密な関係があること、中国とアメリカの関係も、日米関係以上に広く深いことを、冷静に見ておかねばならないでしょう。

12月３日、ＷＴＯ閣僚会議が決裂しましたが、ＡＰＥＣエンジニアの作業は進んでおり、建築家資格など、サービス分野での国際標準問題は目を離せない状況です。

ＪＩＡ次年度役員選挙が行われ、実行力旺盛な近畿の次期支部長に浅田恵弘・アルパックＯＢ会会長が推挙されています。

環境・情報・技術

都市計画法の全面的改正が検討されています。都市計画中央審議会と建築審議会で同時に審議が進んでいます。

その柱の一つに「都市計画マスタープラン」の法定化が上がっています。都市計画の基礎は土地利用です。かねて用途地域の決め方に疑問を呈してきました。今の方法はいわば、“趨勢論”で、地価負担力の法則に従って住環境整備が遅れたまま準工業地域に住宅が浸透し、住居地域に塗り替えられ、工場が追い出され、次には大型商業施設が入ってきます。

土地利用の決め方には、他に少なくとも二つあると考えます。我々の先達、中村炯さんが提唱されていた“適地論”が一つ。活断層や災害経歴のある河川真近に家を建てるのはおかしいのです。もう一つは“造形論”。このような街をつくろうという意志を込めた計画です。都市計画マスタープランは街のビジョンを皆で決めることです。美しい風土や芸術の香り高い町並みを競う時代になります。

このような計画には、自治体毎に先ずベースとしてＧＩＳ（Geographic Information System：地理情報システム）に様々な自然環境・社会文化情報を載せ、討論の形で住民の総意を結集してビジョンを創ること、その達成へのプロセス、優先順位の決定、そして見直しと修正を加えていく新しい方法確立が我々の課題です。今、京都市で取り組んでいる行政区別計画の技術と方法を大事に進めている次第です。

環境と情報技術（ＩＴ）、そして芸術的センスが、21世紀のキーワードです。

エネルギー・地域・住宅

臨界事故は期せずして、エネルギー問題に対する国民的な意識喚起を引き起こしました。

No.85(1997.11)の表紙と“まちかど”に、ブルネイをご紹介しました。1996年６月、クリーン・エネルギー資源、省エネルギー技術、エネルギー政策研究の一環でＬＮＧ液化基地を見ることが目的でした。

シンクタンクの生命力は、常にベンチャーであること。廃棄物処理とエネルギーを“地域”に則して政策化・技術化することは、アルパック次世代の基幹テーマです。平成７年度からの「地域新エネルギービジョン策定事業」に着目し、中国のエネルギー事情視察も

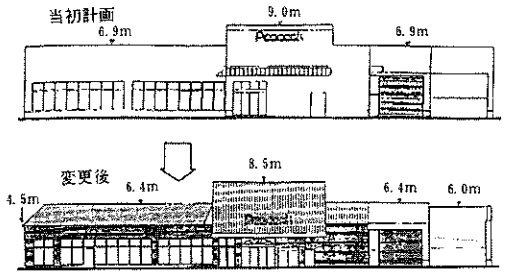
そうですが、分散型エネルギー需給システムを研究しています。それは、コンピュータがあっという間に、パソコン・ネットに展開したように、確実に進む方向と見てきましたが、世界はもっと激しく、大きく、そして非情に動いています。

昨秋10月22日から11月３日まで幕張メッセで開かれた「東京モーターショー」。マスコミは例によって、華やかな面ばかりしか取り上げませんでしたが、私達が最も関心をもったのはフュエル・セル＝ＦＣ（燃料電池と訳されていますが正確ではない）でした。これは燃料革命は勿論ですが、脅威なのは次世代自動車を巡るアメリカの大戦略です。ダイムラー・クライスラーの欧米を結ぶ大合併の意味がはっきりしてきました。アメリカ自動車業界を総動員する United States Council for Automotive Research とクリントン大統領が音頭をとってぶちあげた国家事業－Partnership for New Generation Vehicleです。

住宅用ＦＣの普及は意外に早くなると考えられます。従来、地方公共団体は、エネルギーと通信は関係ない、総合計画にもなかった。それは変わります。

そうした視野ですまい・まちづくりを考えねばならない時代になるでしょう。

（取締役会長　みわ　ひろし）



大丸ピーコック箕面店計画の変更
（四角い倉庫風から低い屋根付き建物へ）

街並み景観を巡る合法性と慣習
ー大丸ピーコック出店への住民活動からー

重本　幸彦

閑静な住宅地へ予想外の出店

閑静な低層住宅地の大阪府箕面市桜ケ丘地域に、予想外の大型店・大丸ピーコック箕面店が出る話が起こりました。１年後の11月に同店はオープンしましたが、近くに住んでいた私は近隣住民の一人として、この問題に関わることになりました。

建設地付近一帯では70年余り前の大正年間に日本では先駆け的な住宅博覧会が開催され、今なお当時の出展洋館住宅などが10軒ほど残り、さらに緑が多く美しい道・紅葉橋（もみじばし）通りがあるなど府内でも有数の美しい住宅地です。売場は800㎡余とそれほど広くはありませんが、長年培った居住環境との調和が問題でした。

合法性と出店期待の中で･･･

当初計画では、境界沿いに若干の緑地は残すものの敷地一杯に建つ高さ6.9m（一部は９m）の四角い建物でした。当然ながら計画は、法令に従った合法的なものです。

また、付近には大型店がなく、高齢化が進む中で地域には期待感もありました。

こうした中、近隣住民の十数世帯は、①地域の良好な環境を守る、②出店者とは理性的に話合うなどの基本姿勢を固めた後、出店側との話合いの場に臨みました。

倉庫的な建物の“圧迫感”が焦点に

当初は、店舗の駐車場確保や周辺での交通問題などが議論の的でしたが、何回かの話合いで焦点は倉庫のような建物による近隣への“圧迫感”の問題に移りました。現地にポールを立て計画中の建物の高さに白布を張り“圧迫感”の体験会も行われました。

さらに「みのお市民まちなみ会議（都市景観に関する市民組織）」のメンバーである地元

の有志が独自に出店側と話合うとともに、住民を支援してくれました。これらの専門的な意見は、出店側に対し説得力を持ちました。

「合法性」をこえ改善へと進む

こうしたやりとりを経て、ようやく出店側から住民側へ①敷地全体を0.5m掘下げる（建物が下がる）、②屋上駐車場（店舗は1階）の外壁の上端を2mセットバックさせ屋根状とするなどの改善策が示されました（前頁図）。

この改善案を巡り複雑なやりとりがあったのですが、近隣住民としては主張どおりではないが、"圧迫感"緩和という一定の成果があるとして受け入れることになりました。

今、振り返ると、これらの住民活動は、出店側が掲げる「合法性」に対し、実証的で粘り強い話合いを通じて、戦前からの閑静な住宅地での「緑の多いゆとりある敷地利用」「圧迫感のある高い建物はできるだけ建てない」など、地域が長年培った「慣習」を守るよう働きかける活動だったと思います。

これからこうした地域の「慣習」を、社会的に適切に位置づけ高めることが望まれます。

（大阪事務所　しげもと　さちひこ）

うまいもの通信
"味集中システム"ラーメン店「一蘭」

馬詰　建

先日、九州への視察の際におもしろいラーメン店を見つけました。

九州地方の方はご存じと思いますが、「一蘭」という、味の方も九州の人気ランキングでは常に1位で行列のできる店だそうですが、そのシステムが特徴的です。

自称"味集中システム"は、券売機で券を買ったのちに、空いたカウンター席を示すランプに従って座ります。各カウンターは隣と小さな壁で仕切られており、前ものれんが掛かっています。オーダーは、のれんの下から注文票が差し出されますので、麺のかたさやスープ、秘伝のたれの濃さ、ネギやにんにくの有無を記入しておけば、ラーメンが運ばれてくるという、要するに小さな自分のスペースで誰とも顔をあわさないで、味に集中して食べることができるというシステムです。

実際には客の回転率や店舗スペースの効率が非常に良い、厨房を覗かれないで済む、といった面も大きいのではないかと思います。

私は味に集中することなく、初体験で気持ちが悪く、なんだかむかついてきて、一口だけで出てきてしまいました。

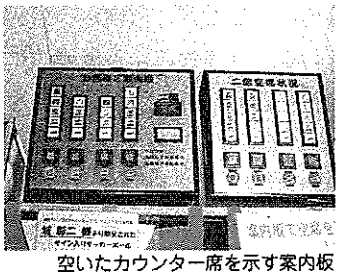
味については一緒に食べた大阪事務所の山本さんのコメントをどうぞ。

コメント：とにかく味はよい。ラーメンは夕食というより、夜食。それまでに（1次会？2次会？）充分同僚・友人等とは会話しているので、ここでは会話する必要もなく、「味」さえ良ければいいのです。したがって私は◎だと思いますよ。

その他、歴史的経緯などについて、ホームページに詳しく記載されています。

HPアドレス：http://www.ichiran.co.jp

（大阪事務所　うまづめ　たけし）


空いたカウンター席を示す案内板

味に集中できる席

元祖唐辛子入りとんこつラーメン

新刊旧刊書評紹介

藤森　照信　著　　朝日新聞社

『タンポポ・ハウスのできるまで』

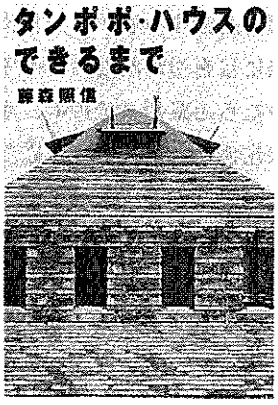
紹介　小林　佑造

今日は1998年４月26日の日曜日、天気は晴。朝庭に出て我が家を振り返ると、タンポポの黄色い花が咲いている（中略）近くの武蔵国分寺の史跡公園や“お鷹の道”の湧水を訪ねる中年のご婦人方が、行きがけの駄賃とばかりにチョイと寄り、「なんでタンポポを屋根に植えているのですか」とか、「どうやって水をやっているのか」とか、「家の中は見られないんですかとか言葉をかけてくる」の書き出しで始まる家は我が家からそう遠くないところにあるので何度か見に行っていることから、ご婦人方の気持ちが良く分かる。

某国立大学建築学科の設計製図の課題で、「有名建築家を自分で選びコピーすること」としたところ、高率でタンポポ・ハウス（藤森邸）があがったという。学生は建築史家藤森照信を知らなくても建築家・藤森照信は知っている。

この本は諏訪に建っている「新長官守矢資料館」と「タンポポ・ハウス」をつくる過程が、建築史的背景を伴って詳細に書かれている。

新長官も出張の折に触れ数度訪ねているが確かに藤森氏の建物は「何か気になる」ものを持っている。本人は「建築界でも一部の人は評価してくれているが、それよりもモダニズムを知らない普通の人が評価してくれてるのがいい」といっているように、読み進むと本人は体質的に古代的で、パナキュラー好きなところがあるように見られ、これは著者が建築史家以外に路上観察者であることからも「建築緑化には、コルビュジェ始め建築関係者がリクツ込みでやるものと、オヤジのような物好きな素人衆が好奇心だけでするものの二系統があるが、この世の全ては素人の好奇心が先行する。どんな専門家も最初は素人なのだ。素人の思いつきには歯止めがなくて、



六本木のビルの屋上で田んぼをつくっている人もいれば、鶏を飼う人もいる。そもそも、人間が緑を生活の中にどう取り込むかにルールはなく、思いもよらぬ実例が路上には転がっている」

そのようなことから「なぜ屋根にタンポポか」は、話せば一冊の本になるほど長いから今こうして書き出したわけで」との言葉通り読み物としても面白い内容となっている。

遊び心もおおせいで田舎である諏訪で夏の日に家族で設計図のない“自家用縄文住居”を一棟建てており、蚊に悩ませながら炉のおきに生木を突っ込み煙で蚊を追い出しながら、竪穴住居では夏でも夜中は炉は燃えていたに違いないと考える。ここで紹介されている二つの建物は建築家が設計したものではなく、それぞれの気候風土に根付いてできた原始的な建築、パナキュラー建築であり、「自分の家ということでやりすぎてしまったことだ。施主のいる建築だと、全てやれるわけでない」といわれるが、この本を読むと、いかに自分たちが材料の選択にしても施工方法にしても、今不十分な状態におかれているかを知ることになる刺激的な一冊である。

（東京事務所　こばやし　ゆうぞう）

まちかど

アジアン・カラーは何色？

武田　宏

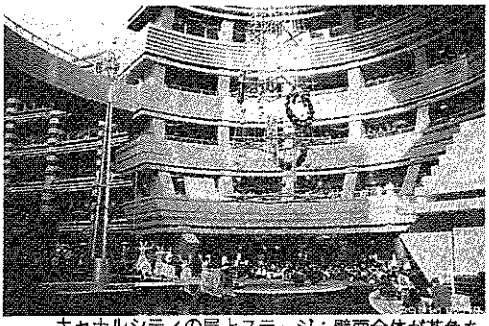
普段は関西で生活する私が、先日出張で福岡を訪れた際に目を引かれたのが街の色です。福岡の街はやたらと茶色（その他、オレンジ、黄色などの特定色相域の色）が目立ちます。その時に漠と感じたのは「茶色＝アジア色やな」ということでした。

福岡市は「アジア太平洋都市」を宣言し、最近でも福岡アジア美術館を整備するなど、アジアの交流拠点として様々な施策を積極展開されているようです。茶を基調とした建築物は、近年ではキャナルシティやソラリア（三越百貨店）などが整備されています。例えば、福岡市都市景観賞の受賞作品にも、茶を基調としたものが多いように思われます（http://www.city.fukuoka.jp/info/fuba/index.htm）。

これで納得できれば良いのですが、一方で普段生活している大阪も、確かアジアの拠点と言っていたような．．．大阪市は総合計画で「アジア・世界をつなぐ交流プラザ」と唱っています。ＡＴＣ（アジア太平洋トレードセンター）や「アジアのハブ空港」を目指す関西国際空港はグレーなどの無彩色を基調としたもので、このような建物や、大阪を舞台にした映画「ブラック・レイン」で表現される無機質でダークな色も、アジアの別の部分を代表する色といえます。

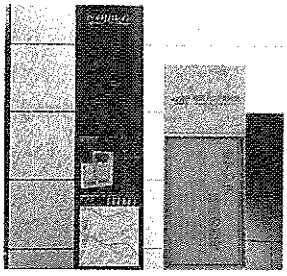
地域をイメージする色は、気候や民族、国旗に至るまで、様々な要素が重なりあって生まれます。福岡で「茶色はアジアの色」と思ったのは私の思いこみでしかなく、当地に住んでみないとわからない、福岡固有の色彩文化のにじみ出しなのかもしれません。

（大阪事務所　たけだ　ひろし）



キャナルシティの屋上ステージ：壁面全体が茶色を基調としたモザイク模様で構成されます

ソラリア（三越百貨店）：三越百貨店と対面する（ガラスに映る）大丸百貨店も茶色の壁面です



福岡アジア美術館の案内板：博多リバレインの案内板やロゴマークは青を基調としたものですが、リバレイン内に整備された福岡アジア美術館の案内板に限り、オレンジ・黄色を基調としたものとなっています

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本　　社
- 京都事務所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F／TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハピエ5F／TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673